

特集：感染症対策と最新研究

【巻頭言】

佐野 壽 昭 (徳島大学第一病理)

齋藤 晴比古 (徳島通信病院)

はじめに

エイズ、病原性大腸菌、MRSA、VRE、結核などの感染症が連日紙面をにぎわし、社会的関心が高まる中、今年4月から新しい感染症予防法が施行され、つい最近、結核非常事態宣言が出された。新興・再興感染症の頻発の要因として、高齢化、医療の高度化に伴う immunocompromized host の増加と日和見感染の増加、環境破壊、交通の国際化などが挙げられるが、感染症の急速な拡散は社会にパニックを引き起こし、地球規模での伝搬により人類滅亡の危機を招く恐れさえある。この春の日本医学会総会で21世紀医学の5つの重大テーマのひとつに感染症を取り上げたのは当然といえる。こうした中、徳島大学では、感染症研究が緊急性のある最重要課題であるとの認識から感染症に関する高度の先進的研究拠点の形成と感染症研究者の育成を行うことを目的に、大学院医学研究科に独立専攻(名称は「感染対応医学系」)を設置することとし、文部省に概算要求することになっている。

この独立専攻は、すでに感染症研究で国際的な実績をあげている寄生虫学、ウイルス学、細菌学、公衆衛生学および1新設講座を基幹講座とし、医学部以外に歯学部、薬学部、工学部、総合科学部の学部間協力と酵素学研究センター、ゲノム機能解析センターの協力を得て組織され、感染バイオロジー、蛋

白機能の解析、遺伝子発現、ゲノム機能解析など多角的な研究協力体制を構築する計画である。感染症研究の拠点はすでいくつかあるが、本大学院独立専攻では、宿主の抵抗性、病原体の感染能、治療薬開発、予防という4つの研究核を備え、基礎研究から創薬にいたる社会還元を目指している。また、2つのセンターをもつことを活用し、蛋白、遺伝子レベルの研究を共通基盤とすることを特徴としている。大学が大学院を充実させることは大学の今後の研究機関としての生き残りをかける側面があり、本大学院独立専攻設置の行方が県下の医療に与える影響は決して小さくない。

本企画は、この独立専攻を構成する関連講座(医学部ウイルス学、医学部寄生虫学、分子酵素学研究センター酵素分子化学、薬学部微生物薬品化学)に最新の研究内容について解説して頂き、大学における感染症基礎研究の一端を紹介することを目的の一つとしている。また、臨床の最前線の立場から馬原文彦先生にご専門の「リケッチア感染症」について述べて頂き、ウイルス、細菌、原虫、リケッチアとそれぞれ異なる病原体に対する感染症研究のアプローチの多様性と奥行きを認識して頂くことを趣旨として企画された。